

令和 4 年 6 月 21 日現在

機関番号：33921

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2021

課題番号：20K21970

研究課題名(和文) 明治期沖縄の散文研究 「書く」ことをめぐる国民の生成

研究課題名(英文) Prose research in Okinawa during the Meiji period National generation about Writing

研究代表者

柳井 貴士 (YANAI, TAKASHI)

愛知淑徳大学・創造表現学部・講師

研究者番号：50871050

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 800,000円

研究成果の概要(和文)：本研究は近代日本成立過程における沖縄のあり様を、散文学の側面から問うものである。そこで明治30年代前半の新聞の記事内容を調査し、言説の形成、読者へ伝達される日本像について考察した。記事を俯瞰すると「地方だより」が重要な役割を占めている。そこでは沖縄の後進性とそこに対置される日本の先進性を語る場面が見受けられる。新聞一面では講談など、日本「的」である文学が掲載され、琉球とは違う内面の生成が図られている。また1907年には読者投稿を促す企画欄「月曜よみもの」が設けられ、読者が「口語体」で書く場が作られる。読み手を含む日本語の教育・共有の場が創造され、国民としての生成が進行していくのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では明治期沖縄にあらわれた「書き手」がどのような環境を受容し、何を書きのこしたかを一次資料などから掘り下げ考察することで、戦後文学研究において焦点化される国家(権力)との関係、自律性の問題のすそ野を拡大する。それは「庶民」が書くこととも関わる問題を秘めており、教育面から「散文」の書き手生育(『琉球教育』などの雑誌)の深度を見ることとも関連する。明治30年代には「烈女お藤」や、実録としての「日露戦争」記が掲載される。これらを考察することで明治期沖縄県民の日本国民への生成の痕跡をみることができる。一次資料からの国民生成の調査は先行研究に少なく、本研究の独自性を示すものである。

研究成果の概要(英文)：This study examines the state of Okinawa in the process of the establishment of modern Japan from the aspect of literature. Therefore, I investigated the contents of newspaper articles in the Meiji 30s, and examined the formation of discourse and the image of Japan transmitted to readers. Looking at the article from a bird's-eye view, "from the provinces" occupies an important role. There, we see scenes that talk about Okinawa's backwardness and Japan's advanced nature that is juxtaposed against it.

On the front page of the newspaper, literature that is "targeted" to Japan, such as ronin songs, is published, and an inner side different from that of the Ryukyu is planned. In 1907, a project column Getuyou Yomimono was established to encourage readers to submit, creating a place for readers to write. A place for the education and sharing of the Japanese language, including readers, will be created, and the generation as a nation will progress.

研究分野：沖縄の近現代文学

キーワード：琉球新報 月曜よみもの 迷ひ心 明治期の散文 地方だより 日本語教育 書き手と読み手の生成  
沖縄

## 1. 研究開始当初の背景

(1) 沖縄をめぐる文学研究においてはポストコロニアル理論など、先鋭的理論的問いを基に、戦後文学作品を中心として多くの研究成果がなされている。その成果は海外の研究状況とも呼応してさらなる深化を遂げている。一方、明治期大正期の散文作品の研究の進捗は充分とはいえない。中央文壇との関連がある山城正忠や池宮城積宝、上間正雄らが主に注目されており、明治の沖縄での書き手の調査は少ない。

(2) 明治期大正期の作品を理論先行的に解釈して、一次資料の精査が行われていない状況が見受けられる。沖縄近世文学研究者池宮正治が、山城正忠が「一九一一年(明治四四)には『アララギ』に、頑固党と開明派の葛藤を描いた戯曲「九年母」を発表している」とするも『アララギ』は『ホトトギス』の誤りであり、「戯曲「九年母」も小説作品である。このような誤記の訂正も必要であると思われる。

## 2. 研究の目的

(1) 本研究は、近代日本成立過程における沖縄の位置づけを文学の側面から問うものである。1879年の「琉球処分」以降、沖縄は大日本帝国の一部を成しながら、その「境界」的な役割を担われてきた。国民化(同化)という問題が常に偏在し、本土との教育や法制度の差異が、戦後の沖縄をめぐる研究環境においては問題にされてきた。文学研究では、すでに詩歌(韻文)の分野で、仲程昌徳、岡本恵徳らの一次資料発掘を中心とした研究が充実しており、その拡充期にあるものと思われる。

(2) 明治期沖縄にあらわれた「書き手」がどのような環境を受容し、何を書きのこしたかを一次資料などから掘り下げ考察することで、戦後文学研究において焦点化される国家(権力)との関係、自律性の問題のすそ野を拡大する。それは詩歌、韻文には現われにくい「庶民」が書くこととも関わる可能性を秘めており、教育面から「散文」の書き手生育(『琉球教育』などの雑誌)の深度を見ることとも関連する。

## 3. 研究の方法

(1) 明治期の散文研究分野の研究はいまだ十分な発展、深化を遂げていない。そこで、本研究では明治期沖縄の新聞や雑誌に記載されている「散文」形式の文章を収集し、どのように「作品」が掲載されたのか(メディア論)、どのような「作品」が書かれていたのか(生成論)、本土との関係はどのようなであったか(受容論)の視点から、「散文」形式の文章を考察していくものである。その目的は、メディアを通して形成される国民化の意図と文学(散文)作品にあらわれる意識/無意識の関連を問うものであり、散文研究を深化させるものである。

(2) 沖縄における言論のあり様を調査する。そのために『琉球新報』などの新聞媒体や『琉球教育』などの雑誌を一次資料として用いる。また日本本土での新聞記事との比較検討も必要となる。

## 4. 研究成果

(1) 2020年からの感染症拡大に伴い、沖縄への訪問が制限されたため、予定された資料収集と調査が十分に果たせなかった。そこで、本土で手に入る資料との比較調査から研究を開始した。本土では明治期に、雑誌が読者から日々の出来事を募集している例がある。例えば『ホトトギス』では日本語で「書く」ことの教育面、詳細に記すことの「写生」面を強調している。その点をふまえて、本研究スタート前に収集した、明治40年代『琉球新報』の企画欄「月曜よみもの」との関連を調べ、また企画欄の内容を分類した。「月曜よみもの」欄は、「其地に於ける時事の出来事」などを「文体は随意なり」として求めており、それまでの文語文体での記事伝達の紙上に、口語文体が求められていることが示されている。投稿内容を分類すると、初期には外国語の「名言・警句」の日本語訳の掲載が目立つ。郷土的、共同体的な関係性に対して、近代的に自立した人格のあり様が投げかけられている。また、中期には日常の出来事が記され始める。日本語を書く主体としての成熟が見られる。教育雑誌との関連から、目標とされた近代的日本人・日本語教育による日本語話者の育成達成の跡がみとれるだろう。さらに、先行研究(引用文献)で触れられている小説作品「短編小説断縁」があらわれる。先行研究では、他愛ない出来事を描写した作品と切り捨てられているが、詳細に分析するとそうだけはいえないことが分かる。作品は、姉の視点から、弟の男女関係の不始末を憂うものであるが、その不始末は新聞というメディアによる伝達がされており、登場人物たちが近代的メディアとしての新聞を「読む」ことで、共同体

的な範囲をこえた領域にまたがる「情報」を共有し、それに対して、「教育を受けねばならない年齢」の男女の恋愛が「規定」されていることが読み込めるだろう。ミシェル・フーコーの述べる「規律」化された身体の在り方が、メディアを通して伝播する様子がかがえるのであった。2019年6月29日に行われた「全国大学国語国文学会」での発表『『琉球新報』をめぐる明治末年の投稿記事 「月曜よみもの」という企画欄』の内容を拡充し、論考のポイントを絞り込むことになった。

(2) 沖縄県立図書館の所蔵する最も古い『琉球新報』から明治30年代までを中心に調査する中で、「地方だより」関連記事が重要な役割を占めていることが分かった。書き手は、中心である那覇と、その周縁地を比較する視点を内在している。沖縄本島北部や離島の生活史が記述される過程で、その後進性が指摘され、近代化の必要性が説かれる。もちろん、出来事の報告という側面も見逃せず、地方史の一部をなす資料としても有用である。また地方出身者からと思われる投稿もあり、興味深い。だが本研究に即した視点(国民の生成)から資料を俯瞰するとき、地方や離島に「近代日本」への同化という未来像が託されている点が浮かび上がるだろう。今後は、資料内容をテーマごとに分類し、内容の共通点をふまえることで、国民として生成されていく沖縄のあり様を考察、証明していく。

(3) 『琉球新報』明治40年代の記事からは、30年代に見られた「講談」などの記事が消える。それまで連載されていた「烈女お藤」の連載や、実録としての「日露戦争」記の、読者への「教育効果」については、新聞・メディア論の観点から今後考察を行う(どのように「作品」が掲載されたのか(メディア論))。

(4) 明治期に始まる移民をめぐる資料収集を試みたが、研究を申請した際に許可された海外への渡航が困難な状況にあるため、ハワイ移民関連の資料が十分に収集できなかった。そのため、南米移民の生きざまを描いた大城立裕『ノロエステ鉄道』を考察することを、現状の代替案として試みた。そこで得た、大城立裕論は、「第36回暁烏敏賞」(石川県白山市主催)において奨励賞のかたちで結実した(「大城立裕の文学と思想への一視点 沖縄を問うための問題意識」)。

(5) 研究調査の過程で、離島での資料収集、また文化の在り方を理解する必要があると考えた。沖縄の都市部の発展と離島、特に文化性が強く発信される久高島のような場所は、近代以降にどのような発展の差異を示していたかも重要な研究課題になるからである。資料収集はやや遅れているが、現地ガイドはじめ島民の方々の話を聞く中で、本研究課題の中心的テーマと直接的には関連はないが、発展的な問題提起ができると感じた点に出会った。そこで、離島の、近世から残る文化性の在り方と、近代・現代の沖縄における文化性の衝突としての文学作品を読み解いた。又吉栄喜「豚の報い」である(『昭和文学研究』昭和文学会、2021年9月83集、168頁~181頁)。

本論では「豚の報い」における 御嶽 創造の場面を反伝統という視点にとらわれることなく考察した。視点人物・正吉の 御嶽 創造の場面に、反復運動と自己肯定の思考を読み、「白一本道」を走る反復運動を襖と解した。そこから父の 御嶽 を変容したものとしての 御嶽 だと解釈した。それは「集合表象」として堆積された伝統的 御嶽 に対置されるものではない。正吉自身の襖としての反復運動は、父の白骨の神としての位相への接近を促していた。ただし、その 御嶽 を支えるのは、豚 食による「浄化」を経験した女性たちであり、その「浄化」苦悩とそこからの解放こそが、「ユタ」的な性格を付与していると考察した。

反伝統という視点を理解しつつも、正吉の 御嶽 創造の場面に、反復運動と自己肯定の思考を読み、変容したものとしての 御嶽 だと解釈した。それは「集合表象」として堆積された伝統的 御嶽 に対置されるものではない。近代化の中で、伝統の正統性も希薄化する。民宿のおかみは、様々な神を同居させていた。「みんな、ありがたい神様ですよ」という思考には、多様的であり、「混沌」とした神的世界を受容する意思がある。ここでは人間が 神 を多種選び取って、意味づけている。「豚の報い」は伝統のバリエーションを付与する可能性をもつ作品なのだ と結論づけた。

## 引用文献

岡本恵徳「明治以後の文学」(『琉球、沖縄の文学』岩波書店、1996)

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 1件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 柳井貴士	4. 巻 83
2. 論文標題 又吉栄喜「豚の報い」論	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 昭和文学研究	6. 最初と最後の頁 168 ~ 181
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.50863/showabungaku.83.0_168	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件）

1. 発表者名 柳井貴士
2. 発表標題 明治期沖縄の新聞における物語形成をめぐって
3. 学会等名 西安日本学研究会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 柳井貴士
2. 発表標題 明治期沖縄における新聞記事と文学の創造
3. 学会等名 早稲田大学国文学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8 . 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------